我、毒ヲ吐ク

Gloria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我、毒ヲ吐ク

【Ｎコード】
Ｎ８９３７Ｊ

【作者名】
Ｇｌｏｒｉａ

【あらすじ】
これは、私達の記憶の中の物語。
誰も知る事のない――――――――この世界の今を生きる記憶の物語。
誰もが忘れたいと切に願う――――――――トラウマ染みた悲しい記憶の物語。

あなたなら、同じ状況で何を思いますか？
あなたなら、同じ状況で何を行いますか？

あなたなら、この気持ちが理解出来ますか？

――――――――私ですか？

――――――――さて、どうでしょうか？

――――――――そこは、あなたの想像力にお任せするとしましょうか？

#1　記憶の序章（前書き）

ぁ、Ｇｌｏｒｉａです。
廻るの方が遅れてごめんなさいｐｑ

ちょっと忙しいので、軽くサクっと別のお話を書きます。
時間つぶしみたいなものなので適当です。

内容は重いかもしれないけどね。

#1　記憶の序章

最初に気がついたのは、小学校の４年生だった。
みんなと一緒に笑って、みんなと帰るのが夢だった。
まっすぐ家に帰ると、お父さんが笑顔で迎えてくれた。
わたしはお父さんに言う。
「お父さん、ただいま」
お父さんが笑顔で返す
「あぁ、おかえりなさい」
「お母さんは？」
「部屋で寝ているよ」
「お母さんにただいまって言ってくるね」
「あぁ、お母さんも喜ぶぞ」
布団で寝ている母に挨拶をする。
「お母さん、ただいま」
お母さんが微笑んで返す。

「おかえりなさい」

「お母さん、体は大丈夫？」

「えぇ、寝ていればね」

「ぁ、お父さんが呼んでいるから、行ってくるね」

私を呼ぶお父さんに駆け寄ると、何故かお父さんは泣きそうな顔をした。

「お父さん、悲しいの？」

「あぁ、心配させて悪かったね・・・大丈夫だよ」

「お父さん大丈夫？具合・・・悪いの？」

「いや、お父さんは元気だよ・・・ずっと元気でいるからな」

お父さんの大きな手が、私の頭を撫でてくれていた。

――――――何かから私を守るように。

#1　記憶の序章（後書き）

サクっといきました！

・・・中途半端に終わるなって？

そこは想像力に期待します（え

#2　コーヒーの味（前書き）

相方さん復帰までテンション下げてやってきたいと思います（・―・）

#2　コーヒーの味

おばあちゃんにつれられて、きょうからほいくえんにかようことになりました。

ほいくえんで、あたらしいおともだちがいっぱいできました。
いっしょにたくさんあそびました。あっちゃんはブロックあそび、なおきくんはおそとでサッカー、さやかちゃんはおままごと。

みんなでいっしょにあそびます。
おひるのじかんになると、みんなはおべんとう。

あたしはせんせいがくれたおにぎりをたべました。

ごごのチャイムがなって、みんなのおかあさんやおとうさんがむかえにきました。
あたしはせんせいに、えほんをよんでもらいました。

おばあちゃんがむかえにきてくれました。

「今日は楽しかった？」

「うんっ」

「今日のお昼はどうしたの？」

「せんせいがくれたおにぎりをたべたよ」

「ごめんね・・・時間がなくて作れなくて、
明日はとびっきり美味しいお弁当を作るからね？」

「うんっ、おばあちゃんのごはんだいすき！」

おばあちゃんにてをひかれて、おうちにつきました。
おばあちゃんはかなしそうなかおをして、はなれのほうにいきました。

おばあちゃんとは、ここでおわかれです。

げんかんをくぐると、しらないくつがありました。
おおきなくつです。おとうさんがかえってきたのだとおもいました。

うれしくなって、いそいでくつをぬぎました。
だいどころにはだれもいません。うえからこえがきこえます。

おかあさんのこえです。

「おかあさん、ただいま～おとうさんかえってきたの？」

おかあさんは、しらないおじさんとだきあっていました。
おかあさんは、あたしをみていいました。

「おかえりなさい」

「ただいま」

「台所で待っていなさい」

「うんっ」

だいどころでまつことにしました。
しばらくすると、しらないおじさんがおようふくをきてかえりました。
おかあさんはえがおで、てをふっていました。

あたしもうれしくなって、いっしょにてをふりました。
おかあさんといっしょにだいどころにいくと、だきしめてくれました。

「飲み物を淹れるから座ってなさい」

「は〜い」

おかあさんはやかんで、おゆをわかします。
ポットがあるのに、やかんでわかします。

ピーーーと、やかんからおとがしました。
すいじょうきがシュシュシュとでています。

「おかあさん、おゆがわいたみたいだよ」

「そうね」

「おかあさん？」

おかあさんはおゆをマグカップにそそぎました。
くろいこなをいれていたので、コーヒーみたいです。
あたしはにがいので、コーヒーがきらいです。

「ねぇねぇおかあさん」

「何？」

「あたし、コーヒーにがいからいやだよう」

「このコーヒーはね？飲むものじゃないの」

「のまないの？」

「えぇ、だって、このコーヒーは・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

おかあさんがわらっています。
おなかをかかえてわらっています。
なにがたのしいのでしょうか？あたしにはわかりません。
おばあちゃんが、あたしのこえをきいてとんできました。
おばあちゃんが、おこっています。
おかあさんを、おこっています。

おかあさんが、おおきなこえでさけびました。

「この疫病神、あんたなんて生まれなければ良かったのに」

おばあちゃんが、こわいかおで、おかあさんをにらめつけます。
おかあさんも、こわいかおで、あたしをにらめつけます。

おばあちゃんが、しんぱいそうなかおで、あたしをつれておふろにむかいました。
スカートをぬいで、つめたいおみずを、あしにかけます。

あたしは、なにかわるいことをしたのでしょうか。
スカートからかんじた、さすようなあつさよりもふしぎでした。

はじめてのほいくえんから、かえったひのコーヒーのあじはよくわかりませんでした。

#2　コーヒーの味（後書き）

（・｜　・）？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8937j/

我、毒ヲ吐ク

2010年10月11日03時55分発行